

素直じゃないな

「パンスー  
て窓を打ちつけられてなんだと思ったら彼女で、いくら隣  
でも窓に向かっけてホーローとか投げんなよって何度言っても聞  
かなくて、大抵用事は  
・腹減った  
・ノド乾いた  
・ヒヤ  
の三択で、今からデパートだ邪魔すんなとかいって確実にぶ  
んむくれて、でも俺とききあう気はさらさららない。  
何様だよ。」



添嶋文庫

素直じゃないな。

添嶋 謙

七年後

「あたし入場券とるからさ、一緒に行こうよ。開会式」  
無邪気な彼女が心底うらやましいと思つた。  
たいていの嫌な予感現実になる。  
その時に一緒にいることはない、だろう。  
「なんか俺たちにもいいことあんのかな」  
わざと声に出した。  
「作ればいいんだよ」  
彼女はどこまでも無邪気だ。

世界一

なんでもこのこと好きになつたんだっけ。  
屋メシ食つてるところを見て思う。飾らないと、よく  
笑うとこ、馬鹿みたいに正直なとこ。  
視線に気づいてこつち見て  
「なに？」  
「つて顔されるとだぶん世界一かわいい。  
俺のこと好きか？  
質問には答えてくれないけど。  
わかつてるからいよいよ。」

わすれないで

君がどうしてもつて言うから、実験台になる。  
記憶は過去に遡つて改変される、その検証。  
君がスイッチを押せば僕は全てを忘れて新しい記憶を得る。  
その瞬間から君とは他人。  
あのお、代わりに覚えててほしいんだ。僕は君がずっと、  
装置を起動。彼の記憶を消す。さよなら、初恋の人。

君の声

小さい頃に死んでしまった友達の声を録音したテープを見  
つけて以来、毎日のように聞いている。  
僕の名前を何度も呼ぶ声が、現実の辛さを忘れさせてくれ  
るようだった。  
ぼくね、あのね。  
他愛ない話が永遠の宝物になるなんて。僕は友達の名前を  
そつと呼ぶと再召喚ボタンを押した。  
なあに？

君に似合う男子

制服の袖も長くなってシャツだけじゃ寒い気がして、ダサ  
いから嫌いだけど、しかたない、ベストを着て登校した。  
眉毛のカット失敗してかなり憂鬱だけど、どうせ誰も見て  
ないからいいのか、つてよくない。  
自分が。よくない。  
君に似合う男子でいたい。  
いいことかどうかはわかんない。

ここにいるよ

またこんなところで寝てる。  
床の上で力尽きたみたいになつて彼にブランケットをか  
ける。  
まったくしようがないな。  
私がつつからここにいるか覚えてないけど、彼がこんなふ  
うになつてるのはいつまでも同じ。  
起きるまでなにかしていればいいか。いないと寂しがるし。  
子供みたいに。